

氏 名	シン 申	エイ 英	ラン 蘭
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)		
学 位 記 番 号	文 博 第 392 号		
学位授与の日付	平 成 19 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当		
研 究 科 ・ 専 攻	文 学 研 究 科 文 献 文 化 学 専 攻		
学 位 論 文 題 目	郁達夫と日本文学の関係試論		

論文調査委員	(主 査) 教 授 大 谷 雅 夫	教 授 木 田 章 義	助教授 大 槻 信
--------	----------------------	-------------	-----------

論 文 内 容 の 要 旨

中国文学史上に於いて、現代文学は、仮にそれを前後の時期に分けて近代文学と当代文学と称するならば、両者は明らかに異なった趣を呈している。その近代文学の萌芽期に文壇に登場した郁達夫は、その出現とともに褒貶相伴う数多の議論を呼び起こした。彼の文学は、鲁迅を第一人者とする中国現代正統文学の枠からはみ出た、特異な存在として注目されるのだが、独自性に富んだ郁達夫文学の原点は、果たしてどこに求めるべきであろうか。

郁達夫の文学は、出発点に於いては勿論のこと、その後の文学の変遷もまた、日本文学から多くの影響を受けていることがすでに指摘されている。そして、郁達夫に影響を与えた作家として、佐藤春夫、田山花袋、谷崎潤一郎、葛西善蔵、島崎藤村、岩野泡鳴、有島武郎、厨川白村、倉田百三などの名が挙げられている。しかし、管見のかぎりではその多くは印象批評にすぎず、曖昧な表現、さらには誤った記述もしばしば見られ、作品に即して、具体的にその影響関係を検証した研究は少ない。

本研究は、従来の正しい研究成果を確認するとともに、新たな視点に基づいて、詳細に作品を分析、検討する実証的考察を通じて、郁達夫が、その長年にわたる日本留学時代に、当時の思潮をどのように受けとめ、どのような理念と小説様式を受け継ぎ、どのように自らの作品に反映させていたのか、その影響関係を明らかにすることを目的とするものである。

第一章

日本の作家の中で郁達夫が最も傾倒していたのは、佐藤春夫であるという。彼は、佐藤春夫と交友関係をもっていた。また、佐藤春夫の作品を読み、模倣しようとした、という記録もある。そして、「日本の現代小説家の中で、私がもっとも崇拝しているのは佐藤春夫である。」という郁達夫自身の明言もあって、彼と佐藤春夫との関係はたびたび議論されている。特に、郁達夫の出世作『沈淪』が『田園の憂鬱』の影響の下に書かれたものであるということは、多くの研究者によって言及されている。本章では、二つの作品を読み比べつつ、具体的にその影響関係の有無を検証した。また、散文的な筆致で感傷的な主人公の内面世界を描き、自伝的な性格をもっているという点において両者は共通しているが、主題は異なっている。このような従来の通説に加え、ここでは新たに、両作品における同趣の表現、共通する形式、語りの特徴の相違点を指摘することができた。

ところで、異国での孤独と悲哀を深刻な筆致で描いた郁達夫の処女作『銀灰色的死』は、主人公の性格、心情、場面の雰囲気描写において、『沈淪』と共通している。そして、注意すべき点は、『銀灰色的死』は『沈淪』と同様の語りの構造をもっているということである。これは、『田園の憂鬱』との最も顕著な相違点である。郁達夫自身が『銀灰色的死』のあとがきに書いている通り、アーネスト・ダウスの伝記とステイブンスンの『一夜の宿』に啓発されて成立した『銀灰色的死』の作風は、『沈淪』にも受け継がれている。また、『沈淪』は、処女作から受け継がれたこれらの理念を基に、具体的な創作方法において、『田園の憂鬱』を模倣したのである。さらに『沈淪』は、一人の作家、一つの作品のみから影響を受けたのではない、ということである。本稿は、『田園の憂鬱』と『沈淪』の影響関係の検証にあたって、郁達夫の処女作『銀

灰色的死』との影響関係にまで言及しえたが、これは、先行研究において見過ごされていた問題点である。

第二章

『沈淪』と『田園の憂鬱』以外にも、郁達夫と佐藤春夫には、共通性が窺える。本章では、まず、二人のそれぞれの自伝をもとに、彼らの生い立ち、経歴、創作活動の類似性を指摘した。佐藤春夫の自伝『回想』の副題には「自伝の第一頁」という言葉が添えられているのである。一方、郁達夫には、全部で九つの自伝があるが、その中に、副題を「自伝の一章」とした『雪夜』がある。さらに、佐藤春夫の『回想』に収められている「誕生」、「最初の記憶」、「死なんとす」、「ハレー慧星」、「お由」、「聖母の曲芸師」に取り上げられている話柄は、郁達夫の自伝に書かれているものと類似している。そして、自伝というものにはありがちなことではあるが、佐藤春夫も郁達夫も、ともに「はしがき」の中で、『懺悔録』の著者ルソーに言及している。したがって、佐藤春夫と郁達夫の自伝には、直接的な関連性があり、郁達夫は、佐藤春夫の作品を念頭において自らの作品を執筆していたのではないかと考えられる。

郁達夫も佐藤春夫に対して影響を及ぼしていたと考えられる。佐藤春夫は、中国ないしは中国文化に、特別な感情を持っており、郁達夫に対しても、強い関心を抱いていた。佐藤春夫は、郁達夫の『二詩人』という作品を翻訳しているだけでなく、たびたび郁達夫に関する文章を書いていた。本章は、佐藤春夫の視野の中に、郁達夫が確実に一定の地位を占めていたこと、そして同時に、郁達夫との出会いが佐藤春夫に創作上の多様性を与えていた、ということの資料的根拠を示すことができたのである。

第三章

郁達夫が日本に留学していた時期は、自然主義文学がまだ健在である一方、「私小説」が次第に隆盛を極めつつある頃であった。佐藤春夫以外に、郁達夫が尊敬し、心酔していた作家の一人に、しばしば葛西善蔵が取り上げられている。確かに、郁達夫の日記には、葛西善蔵についての記述がある。葛西善蔵が自らの生活体験や生活感情に即した語り口を示し、その作品に憂鬱な雰囲気を漂わせている、という点では、郁達夫と共通している。しかし、その文体、構成、雰囲気などが、葛西善蔵の『湖畔手記』（一九二四年）に近いと思われる郁達夫の『鳶羅行』は、それよりも早い、一九二三年四月の執筆であった。

葛西善蔵と共に「破滅型」私小説作家として位置づけられる近松秋江の出世作『別れたる妻に送る手紙』（一九一〇年）は、その文体、構成、情緒等に於いて、葛西善蔵の『湖畔手記』と類似している。そしてさらに、前半部分は妻への謝罪、後半部分は一私娼とのいきさつを述べる、という点においても、愛人との関係を妻に告白するという形で始まっているにも関わらず、後半部分においては、筆の赴くままに、単なる自己の自堕落な生活の告白になっている、葛西善蔵の『湖畔手記』の筆致と同様の特徴が見られる。また、この特徴は、郁達夫の『十一月初三』にも共通点しているものである。もっとも、『十一月初三』（一九二四年十一月三日執筆、同十二月十三日から＜現代評論＞に連載）と『湖畔手記』（一九二四年十月執筆、同十一月＜改造＞に発表）の執筆、発表時期は、ほぼ同じころであるから、互いに影響関係があったというわけではなく、これらの二作品は、それぞれ別個に創作されたと考えなければならない。

私見ではあるが、郁達夫の小説には、近松秋江の作品との間に、非常に強い近似性が見受けられる。郁達夫の創作に対する分析、考察にあたって、本章では、近松秋江を比較の対象として選んだ。すなわち、近松秋江の『別れたる妻に送る手紙』と、郁達夫の『鳶羅行』、主にこの二作品について、具体的に検証している。その結果、郁達夫の作品には、書簡体形式、構成法、真摯な自己告白及び自叙伝的技巧などの方面において、近松秋江の作品と共通する特徴を見出すことができるという結論に達した。

近松秋江と言えば、行方を眩ました妻が泊まり込んでいそうな旅館街を具に尋ね廻るという話が余りにも有名である。一九一一年六月七日の夏目漱石の日記にも、これに関する記述が見られ、同時代の作家たちにもしばしば取り上げられている。異常とも言えるこの話柄を、二年後、作品化したものが『疑惑』である。そして、郁達夫の中篇小説『迷羊』には、これと同類の逸話が記述されているのである。この二つの小説を読み比べて見ると、恥も外聞もわきまえず、姿を隠した女の後を追う主人公の執拗な態度、その狂気じみた必死な行動、そして、妬ましく憎らしい感情に身悶えし、涙脆い男として描かれている登場人物や場面の設定に於いて、ともに似かよった側面を見出すことが出来るのである。『迷羊』の主人公の行動が、郁達夫の生活体験から生じた自己内部の感情に基づいているとはいえ、彼の作品に見られる主人公の弱々しい性格と、その

常識を逸脱した行動は、近松秋江の作品群に見られる明瞭な特徴と一致しているのである。そして、このような具体的な場面の設定や情景描写の一致に加え、この部分は、郁達夫による模倣・借用と考えて差し支えないのではないと思われる。

第四章

郁達夫の作品には、欲望を満たし得ず、悲愴感や没落感を味わい尽くした主人公がしばしば登場し、彼らは自分のことを「零余者」、「無用の人」、「臆病者」、「游民」と呼んでいる。張恩和氏は、『郁達夫研究綜論』において、「実際、郁達夫は十九世紀ロシアの『多余人』から啓発を受け、且つ共鳴し、更に、二十世紀初期中国青年一世代の焦躁と苦悶を表した。ひいては、『零余者』を『多余人』の同義語、或いは其のもう一つの訳語と見なすことができる。」と、指摘している。

ここで述べられている「零余者」こと「多余人」とは、ロシアの「лишний человек」のことであるが、このロシア語は、日本では、「余計者」と翻訳されている。佐藤春夫は、中国語の「零余者」という単語を、「余計者」という日本語で翻訳している。一方、中国では、ロシアの「лишний человек」は、一般的に「多余人」と翻訳されている。しかし、郁達夫は、ツルゲーネフの『余計者日記』を「零余者日記」という中国語に翻訳している。郁達夫は、この「零余者」という言葉を自分の作品に使っているのだが、「零余者」、「無用の人」、「臆病者」、「游民」などという語は、すべて同一の理念であり、このような自己否定の概念は、彼の小説全般にわたる主要なテーマの一つといってよい。郁達夫の作品のなかでは、所謂「零余者」文学が、非常に大きな比重を占めているのである。

郁達夫が、ロシアの「余計者」から自己否定の理念を受け継いでいたことは、周知の事実ではあるが、具体的な創作方法や、「零余者」として描かれている典型的な人物像は、ロシアの「余計者」とは、実は大きな違いがある。日本では、二葉亭四迷がツルゲーネフの『ルーゼン』を翻訳してから、大きな反響を呼び、主人公「ルーゼン」は、「余計者」の代名詞にまでなっていた。日本の多くの作家たちはこれに強い刺激を受け、自らの作品のなかで、それを生かそうと試みた。しかし、郁達夫の作品には、それらの作品とも歴然とした違いがある。また、「零余者」というのは、明治末期の社会問題として論じられ、実生活に基づいて定義された「高等遊民」とも異なる。また、「高等遊民」をいち早く小説に取り入れて、一種の典型的人物像を造型した夏目漱石の『それから』の代助、『彼岸過迄』の須永と松本、芥川龍之介の『路上』の俊助に代表される、文学上の「高等遊民」とも峻別しなければならない。

郁達夫作品の主人公たちは、生活の不安定からくる悩み、行動のパターン及び社会的に置かれた立場などにおいて、ロシアの「余計者」、日本の「ルーゼン」および「高等遊民」という人物像とは、異なっているのである。郁達夫作品の「零余者」には、貧しい文人が多く、その作品には、そういう知識人たちの生活の不安定、社会的苦悶及びその窮状と憂慮が描き出されている。この点では、むしろ、近松秋江の作品に登場する「下等な遊民」に類似していると言える。

本章では、近松秋江の「遊民」と、郁達夫の「零余者」に焦点を当てて考察した。その結果、「零余者」「遊民」の実体は、本質的には同類のものであるという結論に達した。

郁達夫は、日本で高等教育を受け、日本で初めて西欧の近代文学に接した。しかし、西洋の文学作品を読んで感心はしても、生活基盤を異にする、西洋の理論と方法とを自らの作品に取り入れるのは難しい。自分と類似した生活に支えられている作品からは、共感も覚えやすく、模倣もしやすかったのではないだろうか。郁達夫の意識の奥底に培われていたものは、近松秋江のような日本の近代文学者が感じていた無力感だったであろう。「零余者」という人物像について、今までは、西洋文学の直接的な影響しか論じられていなかったが、郁達夫の創作における具体的な手本は、西洋の作家たちの作品よりも、もっと身近な日本の文学作品にあったのではないかと考えられる。

論文審査の結果の要旨

日本の文学史は、中国文学の先進的な表現の受容に彩られる点でほぼ一貫するものであるが、近代に及ぶと、日本から中国へという逆の流れが生じることがあった。中国現代文学黎明期の作家郁達夫が日本近代文学に影響を受けたとされることもその一例である。本論文はそれを、佐藤春夫、近松秋江と郁達夫との関わりにおいて実証することを課題とするものである。

大正二年からの八年余り日本に留学した郁達夫は、佐藤春夫に親炙し、その文学を崇拜、模倣しようとしたことを自ら明言している。本論文第一章は、郁達夫の出世作『沈淪』と春夫の『田園の憂鬱』との関わりを論ずるに当たり、まず定本『田

園の憂鬱』の刊行に至るまでに五段階の改稿、発表過程があったうち、郁達夫は、その四番目の短編集『病める薔薇』を読んでいたであろうことを推定した。そして、その基礎の上に立って両作の共通点を逐一に指摘して、『沈淪』が『田園の憂鬱』の影響を受けたと考えられることを論じた。両作の深い関係は従来の研究にも度々示唆されてはいるが、本論文はそれを実証しようとする初めての試みである。しかも本論文は、『田園の憂鬱』の世界が夫と妻の双方の視点から描かれているのに対して、『沈淪』は三人称の主人公の視点からのみすべてが語られる、むしろ田山花袋『蒲団』などの私小説に共通する語りの構造をもつものであり、それは処女作『銀灰色の死』以来変わらぬ郁達夫の文体であることを明らかにする。また、『田園の憂鬱』の主題が生と芸術の苦悶、『沈淪』のそれが性と民族の苦悶と、それぞれが主題を異にすることを明らかにするのにも成功している。佐藤春夫から郁達夫への影響を説いた上で、むしろ逆に両者の文学の性格の相違にまで言及しえているところに、本論文の成果が存するであろう。

本論文の後半の二つの章は、郁達夫と近松秋江との関係を考察するものである。郁達夫における日本の私小説の受容については、葛西善蔵との関わりを重視することが従来は一般であったのに対して、本論文第三章は、郁達夫『鳶羅行』と近松秋江『別れたる妻に送る手紙』を詳細に比較して、両者がともに書簡体小説であること、また、妻への謝罪の気持を縷述する前半、情痴にふける自堕落な生活を告白する後半に分かれるというややバランスを欠いたような構成法も同じであり、さらには郁達夫『迷羊』、秋江『疑惑』が、逃げた女を捜しまわる自らの痴態を描くことでも一致することを根拠として、郁達夫はむしろ近松秋江の私小説の影響を受ける可能性が高いことを説いた。また第四章は、ロシア文学の「лишний человек」が「多余者」「零余者」あるいは「余計者」などと訳されて日中の文学に大きな影響を及ぼした中で、郁達夫の『沈淪』の主人公は、ツルゲーネフのルージン、また夏目漱石のいう「高等遊民」とも異なって貧窮のうちに苦悶する文人として描かれており、むしろ近松秋江の『遊民』などの一連の作が貧しい下等遊民の退嬰的な自己告白を繰返すのを直接的な手本とする可能性を指摘する。確かに、郁達夫にとっては西洋文学よりはむしろ同時代の日本文学、ことに近松秋江の私小説のほうがはるかに身近な存在であったはずであり、そのような影響関係が存在した可能性は小さくない。『沈淪』の「零余者」の像をロシア文学の影響としてしか見てこなかった従来の研究に対して、一石を投ずる新見として価値をもつであろう。しかし、これは本論文の前半部分にも通じることであるが、数々の共通点の列挙は影響関係の実証には必ずしもならず、時に議論に隔靴搔痒の感がともなうことは否定できない。影響関係を性急に説くよりは、その共通点を確認した上で、両者の文学の相違点を考えてみる方が研究としてはより生産的であったかもしれない。今後の論者には、郁達夫に限らず、また春夫・秋江に限らず、より広く、日中の近代文学の交渉を詳細に調査し、その諸相を描出し、さらに両者の間に見られる共通点と相違点の意味について精思する研究を期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成十九年一月二十六日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。